

小学校教諭の器械運動指導に関する意識について

～群馬県A市小学校教諭に対する意識調査から～

清水清志・塩原 茂・金子伊樹
関口明宏・高橋珠実・新井淑弘

群馬大学教育実践研究 別刷
第36号 107～116頁 2019

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

小学校教諭の器械運動指導に関する意識について

～群馬県A市小学校教諭に対する意識調査から～

清水 清 志¹⁾・塩 原 茂²⁾・金 子 伊 樹³⁾
関 口 明 宏⁴⁾・高 橋 珠 実⁵⁾・新 井 淑 弘⁶⁾

- 1) 一般社団法人セレソン群馬スポーツクラブ (元 安中市立安中小学校)
- 2) 群馬大学附属幼稚園
- 3) 群馬大学大学教育センター
- 4) みどり市立大間々南小学校
- 5) 東洋大学
- 6) 群馬大学教育学部

Awareness about gymnastics education among elementary school teacher

Kiyoshi SHIMIZU¹⁾, Shigeru SHIOBARA²⁾, Yoshiki KANEKO³⁾
Akihiro SEKIGUCHI⁴⁾, Tamami TAKAHASHI⁵⁾, Yoshihiro ARAI⁶⁾

- 1) general incorporated association Seleccion sports club (Annaka City Annaka Elementary School)
- 2) The kindergarten attached to Gunma University
- 3) Gunma University University education center
- 4) Midori City oomamaminami Junior high school
- 5) Toyo University
- 6) Faculty of Education Gunma University

キーワード：器械運動、小学校教諭、意識調査、苦手意識、教員研修

Keywords : Gymnastics, Elementary School teacher, an attitude survey Awareness, a teachers institute

(2018年10月31日受理)

要 約

小学校では、体育授業を学級担任が実施することが原則になっているが、近年では、高学年において専科制が導入されるなど徐々に小学校の実態に応じた取り組みが工夫され実践されるようになってきた。しかし、多くの場合、学級担任が授業を実施しているのが現状である。小学校教員の体育授業についての意識、特に、今回は器械運動についての意識をアンケート調査し、よりよい体育授業づくりに向けてどのように取り組んでいったらよいか、体育実技講習会の在り方について反映できることはないかを研究目的として実施する。器械運動に関しては、小学校教員の6割から7割近くの教員が不得意意識を持っている結果が見られた。特に鉄棒運動、跳び箱運動、マット運動の順番で苦手意識を持っているようである。講習会で研修したい内容としては、技能を身に付けさせるポイントについて、場の工夫の仕方について研修を深めたいと考えている。講習会の事後アンケートの感

想でも技術習得のための支援に関するポイントが学べたなどの感想が見られた。教員の苦手意識を克服していくための内容を大切に講習会を開催することが重要であると考えられる。

1 はじめに

日本の健康とスポーツの発展について、長年学校体育が担ってきた役割は、たいへん大きいものと考えられる。しかし、昨今、社会の変化、とりわけ、機械化によって生活が便利になったものの、運動不足などから生活習慣病になるなど成人の健康についての問題が多くみられるようになった。児童生徒に関しても外遊びの減少、室内でのゲーム遊びが増えるなどして体力低下がみられるなどの問題が起こりつつある。教育現場では、学校体育における体力向上の取り組みが非常に重要な課題になっている。そのため、各小中学校で体力向上プランを作成し、計画的に取り組むことで、児童生徒の体力を高めていく施策が実践されている^{1,2)}。

中学校においては、保健体育科の教員が専門性を活かして体育の授業を行い、部活動との連携を深めながら体力向上のプランを実践している。一方、小学校においては、学級担任が体育の授業を行っている。専門性を活かしているとはいえない状況で体力向上や技能の習得を求められているわけである。

小学校教員の体育の授業を実践するための資質を向上させていくために、長年、群馬県および各市町村で

体育実技講習会を開催している。A市においても小学校体育実技講習会が毎年夏休みに開催されている。教員の指導力向上を目的に、どんな種目をどのように実施するかが、毎年の検討課題である。

A市は、群馬県西部に位置し平成18年に旧A市と旧M町が合併して誕生した市である。人口は、日本人58,670人、外国人490人である。A市内の小学校は、旧A市内に7校、旧M町に5校の合計12校である。旧A市内の小学校は、1学年複数学級を有するが、旧M町内の小学校では、単学級の学校がほとんどである。教員数は、およそ200名で、学級担任が約140名である。なお、この地域は、教育活動に熱心な地域であり、長年、碓氷教育会と呼ばれる教職員団体が各教科の研修会を開催したり、児童生徒のための行事を企画運営したりして、教育活動を推進してきた。体育実技講習会も碓氷教育会の事業として長年進めてきたが、体育主任会との関係を図りながら現在も継続されている。運動会や必修単元として位置づけられていることによりダンスや表現運動が多く、他の種目は、5～7年に1度の割合での開催になっている。教員の指導力向上を目指し、よりよい実技研修を実施するために協議を重ね研修会を開催している。

表1 過去10年間のA市小学校体育実技講習会内容

実施年度	実施内容
平成19年度	低学年 基本の運動(体ほぐし)・ダンス
	高学年 ダンス・マット運動
平成20年度	低学年 基本の運動(陸上)・ダンス
	高学年 ダンス・陸上競技
平成21年度	低学年 多様な動きづくり・ダンス
	高学年 ダンス・ボール運動
平成22年度	ダンス・器械運動
平成23年度	ダンス作り方 体づくり運動
平成24年度	タグラグビー・プレルボール
平成25年度	陸上競技
平成26年度	ダンス
平成27年度	体づくり運動
平成28年度	ボール運動(サッカー)
平成29年度	器械運動

II 研究目的

小学校では、体育授業を学級担任が行っている。高学年の体育授業に専科制を導入したり、体育コーディネーター（仮称）がリーダーシップを発揮し、授業を行っている学校もある。しかし、低学年の授業をはじめほとんどの授業を学級担任が行っているため、群馬県及び各市町村で体育実技講習会を開催し資質の向上を図っているのが現状である。2017年度においてA市の体育実技講習会を開催するにあたり「器械運動」が種目決定された。講習会内容を検討するために事前アンケートを行うこととした。小学校の学級担任が体育の授業について、特に器械運動の授業についてどのような意識を持っているか、調査を行うこととした。教員が「器械運動についてどう思っているか」「授業づくりで困っていることはないか」「体育実技講習会で研修したい内容は何か」など器械運動の指導の現状を把握するとともに、今後の体育指導や体育実技講習会の在り方に反映させていくことを研究の目的とする。

III 研究方法

1. 対象

A市内の小学校で現在学級担任をしている教員（以下「教員」という）138名

2. 調査期間・方法・内容等

(1) 調査期間

アンケート調査 2017年7月1日～7月20日

講習会実施日 2017年8月4日

講習会実施後、事後アンケート調査を実施。

(2) 調査方法

アンケート調査は、アンケート用紙を事前に各学校へ送付し、学級担任への配布、記入、回収、返送を依頼した。記入後アンケート用紙を回収する。質問紙には、学校名、氏名を記入してもらった。

(3) 調査内容

小学校の学級担任が、器械運動の指導に対して持っている意識及び体育実技講習会で研修したい内容を選択式および自由記述により調査した。

講習会実施後のアンケートでは、講習会後の感想を自由記述により調査した。

(4) 個人情報への配慮

調査結果については、データ入力の際、氏名をID化して、個人が特定できないよう配慮した。

IV 結果

2017年度、A市体育実技講習会では、7年ぶりに器械運動をテーマとして実施することになった。そこで、小学校の学級担任が器械運動についてどのような課題を持っているかを事前に調査し、その結果を踏まえて講習内容の検討を行うこととした。アンケートを学級担任138名に依頼し、各小学校の体育主任が、回収する。回収数は、121名、回収率は、87.1%となった。

1. 器械運動の指導の難しさについて

質問1「器械運動の授業を行うときに、指導することが難しいと思っている種目は何ですか？難しいと思っている順に番号を記入してください。」を設定して、①跳び箱運動②マット運動③鉄棒運動④固定施設や平均台の4種目について指導する上で感じる難しさの順位を聞いた。正しく順位をつけて回答した教諭が、105名、(○)印を付けて回答した教諭が、16名で、合計121名の回答であった。質問方法に課題を残してしまう^{5, 6, 10, 11)}。

小学校の教員が指導することに、最も難しさを感じている種目は、「鉄棒運動」という結果になった。

105人中51人(43.2%)の教員が鉄棒運動の指導にむずかしさを感じていると回答した。(○)回答の人数を含めれば、64人になり、半数以上の教諭が最も難しさを感じている種目ということになる。さらに、鉄棒運動の難しさ2番と回答した27人(22.9%)を合わせれば、実に75%以上になり、小学校教諭の3/4近くの人たちが鉄棒運動の指導に難しさを感じていることになる。

鉄棒運動に次いで難しさを感じている種目が、「跳び箱運動」である。難しさ2番の回答が、最も多く、37人(33.3%)の回答があった。難しさ1番の回答も、29人(26.1%)で合わせれば、66人(59.4%)となり、6割近い教諭が跳び箱運動について指導に難しさを感じていることになる。

マット運動については、難しさ3番の回答が最も多く、41人(36.9%)であった。しかし、マット運動に

ついて難しさ1番の回答も13人(11.7%)で難しさ2番の回答35人(31.5%)と合わせれば、48人(43.1%)が難しさを感じていることになる。

学習指導要領等で全学年を通して実施することとされている3種目について、指導することの難しさを小学校教諭は大いに感じているということがわかった^{1, 2)}。

また、固定施設の遊具や平均台などの指導については、難しさ1番の回答が、12人(11.2%)であった。固定施設の遊具や平均台などは授業での実施率が低い点を考えるとこの結果を「少ない」と解釈するのは難しく、今後、調査および検討が必要であると考え。

2. 器械運動の4種目の指導に関する得意・不得意の意識について

質問2「マット運動・跳び箱運動・鉄棒運動・固定施設や平均台運動などの指導は得意ですか?」^{5, 6, 8)}

回答方法は、①得意②やや得意③どちらでもない④やや不得意⑤不得意の5項目からの選択とした。各項目の回答者数と割合(%)を表3に示した。

(1) 跳び箱運動の指導の得意・不得意意識について

跳び箱運動の指導を得意あるいはやや得意としているという回答は、21人(17.4%)であった。マット運動より少ない回答になっている。また、やや不得意あるいは不得意という回答は、46人(38.0%)であった。1/3以上の教諭がやや不得意あるいは不得意な意識を持っていることになり、マット運動の指導と比べ、やや得意という教員の数減少し、やや不得意と感じている教諭の回答数が多いのが特徴である。

(2) マット運動の指導の得意・不得意意識について
マット運動の指導を得意あるいはやや得意としているという回答は、26人(21.5%)であった。1/5近

くの教諭が得意・やや得意としているという結果である。4種目の中では、得意・不得意としている教員が最も多い種目である。また、やや不得意あるいは不得意という回答は、41人(33.9%)であった。1/3近くの教諭がやや不得意あるいは不得意な意識を持っていることになる⁸⁾。

(3) 鉄棒運動の指導の得意・不得意意識について

鉄棒運動の指導を得意であると回答している教諭は、0人であった。やや得意であるという教諭も12人(9.9%)で10%以下の結果であった。さらにやや不得意と回答している教諭が、46人(38.3%)と他の種目に比べ圧倒的に多い。不得意と感じている回答と合わせれば61人(51.2%)と半数以上の教諭がやや不得意あるいは不得意の意識を持っていることになる。もっとも不得意な種目であるということがいえる。

(4) 固定施設・平均台などについて

固定施設遊具・平均台などの指導については、どちらでもないと回答している人数が多く、71人(59.5%)の回答であった。あまり遊具等の指導について得意・不得意感を意識していないことがうかがえる。

器械運動について4種目の得意か不得意の意識を比較するとマット運動の指導は、得意あるいはやや得意と感じている回答が一番多く、鉄棒運動の指導は、やや不得意あるいは不得意と感じている回答が一番多いという結果になった。

(5) 器械運動の4種目について全体の状況をみた。

次の6項目にまとめ比較した。

- ① 4種目すべて得意かやや得意としていると回答している教員
- ② 1種目以上得意・やや得意があり、やや不得意・不得意がないと回答している教員
- ③ 得意・やや得意の種目とやや不得意・不得意の種目

表2 器械運動の指導の難しさについて

	跳び箱運動		マット運動		鉄棒運動		固定施設・平均台	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
難しさ1番	29	26.1	13	11.7	51	43.2	12	11.2
難しさ2番	37	33.3	35	31.5	27	22.9	6	5.6
難しさ3番	31	27.9	41	36.9	20	16.9	13	12.1
難しさ4番	8	7.2	16	14.4	7	5.9	74	69.2
その他	6	5.5	6	5.4	13	11.1	2	1.9

*その他…誤回答をした数(16名)優先順位を答えずに、(○)回答で難しさを答えた数値

*%は、「その他」の数値を含んだ数を合計値とした。

表3 器械運動の種目別得意・不得意の意識について

	跳び箱運動		マット運動		鉄棒運動		固定施設・平均台	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
得意	3	2.5	4	3.3	0	0.0	2	1.7
やや得意	18	14.9	22	18.2	12	9.9	14	11.6
どちらでもない	54	44.6	54	44.6	48	39.7	72	59.4
やや不得意	33	27.3	26	21.5	46	38.0	27	22.3
不得意	13	10.7	15	12.4	15	12.4	6	5.0

を両方持っているとは回答している教員

④ 4種目すべてどちらでもないとは回答して教諭

⑤ 1種目以上やや不得意・不得意があり、やや得意・得意がないとは回答している教員

⑥ 4種目すべてやや不得意・不得意とは回答している教員

器械運動の指導について、やや不得意あるいは不得意な種目が1種目以上あると回答した教員が35.5%、4種目すべてやや不得意・不得意であると回答した教員が16.5%であり、両方合わせれば50%以上の教員がやや不得意あるいは不得意意識を持っていることになる。これに、4種目すべてにどちらでもないと答えている教員の18.3%を加えると器械運動を得意あるいはやや得意としている種目がない教員は70.3%と高い比率を占めていることになる。器械運動の指導を、4種目すべてに得意あるいはやや得意であると意識している教員は、1.7%と非常に少ないことがわかる。

1種目以上得意あるいはやや得意の種目を持っていると回答している教諭の14.0%を合わせれば15.5%となる。

1.2の設問の結果から器械運動の指導にむずかし

さを感じ、やや不得意あるいは不得意な種目であるという認識を持った教員が非常に多いことがわかる。

3. 器械運動の指導で困っていることについて

質問3「器械運動の指導で困っていることがありますか?」という質問に対する自由記述をまとめると以下のような結果となった。

○ 1種目以上得意・やや得意としている教員

- ・効率的で技能が高められる場の設定を追求しています。
- ・こわいと思ってしまう子の指導をどうしたらよいか?
- ・授業中に児童の演技を動画でとり、その場で見合うスペースを作りたいが、準備する時間がなかなかとれない。
- ・マット運動や跳び箱運動の回転技において補助の手を当てる位置がわからない。
- ・児童自身に技能を身に付ける水準の身体能力が身に付いていない。

○ 得意・やや得意とやや不得意・不得意の両方ある教員

- ・場の設定をどうするか、また心配な児童が多いの

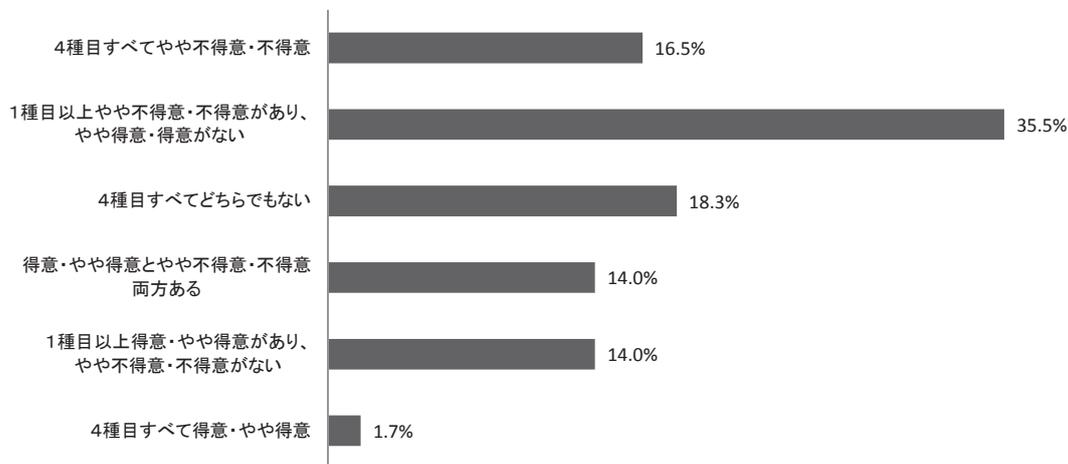


図1 器械運動4種目全体の得意・不得意の意識について

表4 器械運動の指導で困っていること

回答項目	回答人数 (人)	%
○それぞれの種目で技能の手本が見せられない	72	59.5
○それぞれの種目でどんな内容を指導していったらよいかわからない	29	24.0
○児童の技能差をどう指導・支援していけばよいかわからない	67	55.4
○運動量を確保するための指導法がわからない	26	21.5
○用具の準備や片付けに時間がかかり実技をする時間が減ってしまう	24	19.8
○けがをするのがとても不安である	53	43.8

で、たくさん場を作ったときに見守りについてどうしたらよいか、悩んでいます。

- 全ての種目でどちらでもないと回答している教員
 - ・少人数の規模の学級なので、低学年では、マットや跳び箱の準備だけで時間がかかります。ある程度数を出さないと待ち時間が長くなり、バランスを工夫して行けたらと思っています。
 - ・1人での指導に限界がある。場の設定や安全確保、技能差に対応するには、TTなど複数での指導の必要性を感じる。
- 1種目以上やや不得意・不得意を持っている教員
 - ・跳び箱では、台上前転などけがをさせないか、とても心配です。よい指導を知りたい。
 - ・高学年の児童で鉄棒の指導でぶら下がるだけで精一杯という児童への指導・支援。
 - ・得意な児童にも満足させたいが、不得意な児童の指導に力が入ってしまい、十分にみてあげられない。けがも心配で得意な児童を伸ばすことができない。
 - ・技能の高い児童への指導
 - ・そこそこできる児童へのモチベーションの与え方
 - ・どのようなポイントを教えれば、できるようになるかわからない。
 - ・個人個人で取り混ぜる時間と全体指導の時間配分がわからない。
- すべてやや不得意・不得意である教員
 - ・動きが改善されるようなサポートや言葉がけが難しい。

4. 体育実技講習会で研修したい内容について

質問4 「体育実技講習会で研修したい内容は何ですか？」

表の6項目について複数回答可として、調査を行った。

- マット運動・跳び箱運動・鉄棒運動を楽しく行うための場の工夫79人 (65.3%)
 - 技能を身に付けさせるためのポイント72人 (59.5%)
 - 低学年・中学年向けの器械運動54人 (44.6%)
 - この3項目が高い回答をしている。自由記述では、次のような意見があった。
 - 1種目以上得意・やや得意としている教員
 - ・苦手意識のある児童への指導方法
 - ・安全確保と技の成功を導く教師側の補助（手の位置）
 - ・マットの敷き方・跳び箱の置き方（体育館での配置の仕方）
 - ・日常的に器械運動の技能を身につく水準になるように運動習慣を身に付けさせる指導
 - 得意・やや得意とやや不得意・不得意の両方ある教員
 - ・特に鉄棒において楽しさを感じさせる場の工夫について学びたい。（「できた喜び」を味わわせられる具体的な支援や段階に応じた場の設定など）
 - ・子供たちの筋力が衰え体幹の弱さをどうやれば向上させられるか。
 - 全ての種目でどちらでもないと回答している教員
 - ・場の工夫のバリエーションがないので、教えていただきたい。
 - ・子供たちが楽しみながら意欲を持って取り組める場の工夫や指導方法が知りたい。
 - 1種目以上やや不得意・不得意を持っている教員
 - ・器械運動の苦手な子の指導
 - ・適切な補助の仕方
- 今回の事前アンケート結果を参考に講習会の内容を検討し、講師に依頼した。また、この結果をもとに、今回の講習では、以下の2点について配慮を行い内容を構成した。
- ①鉄棒運動に苦手意識を持っている教員が多いため、鉄棒運動を中心に実施する。

表5 体育実技講習会で研修したい内容

回答項目	回答人数 (人)	%
○低学年・中学年向けの器械運動	54	44.6
○高学年向けの器械運動	40	33.1
○技能を身に付けさせるためのポイント	72	59.5
○マット運動・跳び箱運動・鉄棒運動を楽しく行うための場の工夫	79	65.3
○器械運動の評価の工夫	30	24.8
○用具の工夫	34	43.8

②鉄棒以外の器械運動の内容も取り入れ、そこでは各種目の重要な「指導のポイント」の確認を行う。

V 考察

1. 器械運動の指導の難しさについて

質問1の「器械運動の指導の難しさ」については、鉄棒運動で約75%、跳び箱運動で約63%、マット運動で約45%の教諭が「難しい」と回答していることから、ほとんどの教員が指導することの難しさを感じており、苦手意識を持っていると考えられ、体育授業での指導に大きな影響を与えている。特に鉄棒運動については、非常に高い回答率が見られ、不安を抱いている。

質問2の「器械運動指導について各種目別の得意・不得意意識について」の項目の結果からも同様のことが考えられる。各種目の指導が得意あるいはやや得意と回答している教員は、マット運動では、21.5%、跳び箱運動では、17.4%、鉄棒運動では、9.9%と非常に低いことから苦手意識を持っている教員がたいへん多い。

器械運動指導上の課題については、苦手意識の要因と考えられる「困り感」について聞いてみた。質問3の「指導で困っていることは何か」の回答から推察することができる。質問3の項目で回答率の高かった項目「それぞれの技能の手本が見せられない」が、59.5%であった。次に「児童の技能差をどのように指導・支援していけばよいか、わからない」という回答が55.4%あった。手本を見せることが指導方法として大切な要因と考えている教員は多い。しかし、加齢にともなう体力的なおとろえや実技指導に恐怖心を抱き、見本が見せられなかったり、元来、器械運動の実技ができないことが、手本を見せられない要因になっ

ていると考えられる。見本が見せられないために指導することのむずかしさを感じたり、指導は、不得意であるという意識を持ってしまっているようだ。

器械運動の技の理解、アドバイスポイントを理解できていない点も課題になっている。技能習得に対しての「児童の技能差をどのように指導・支援していけばよいか、わからない」という回答も55.4%ある。「児童が技術を身に付けるためにはどのように指導したらよいか」「楽しく技術を身に付けるにはどう指導したらよいか」「けがをしないで技術を身に付けるにはどうしたらよいか」器械運動の技も多種目にわたり、技の構成要素を理解することも難しく、アドバイスするポイントもわからないのが現状である。これら要因が指導の難しさを感じたり、不得意意識にもつながっていると考えられる。

今回、固定施設（遊具）や平均台についても回答を求めている。指導するうえでこの種目について難しさを1番と回答している教員が10%近くいた。他の種目に比べると少ないと考えられる。しかし、「指導したことがないのでわからない」という自由記述での回答もあったことから、小学校に設置されている固定施設遊具に関する意識調査をさらに検討していく必要がある。休み時間での自由遊びでの利用だけでなく、体育授業の中で有効活用し、効果的な利用方法の検討および研修会等の企画も必要ではないかと考える。教員が器械運動の4種目について得意であるか不得意であるか意識を次の6項目に分けることができた。

- ① 4種目すべて得意・やや得意としている教員
- ② 1種目以上得意・やや得意で、やや不得意・不得意の種目を持っていない教員
- ③ 得意・やや得意とやや不得意・不得意の両方の回答があった教員
- ④ 4種目すべてどちらでもないと回答した教員

⑤ 1 種目以上やや不得意・不得意で、得意・やや得意の種目を持っていない教員

⑥ 4 種目すべてやや不得意・不得意としている教員
器械運動指導の全体の状況についても、「4 種目すべて不得意あるいはやや不得意」と回答している教員が 16.5%、さらに 1 種目以上やや不得意あるいは不得意であり、得意あるいはやや得意な種目は持っていないという回答が 35.5% で合わせれば 50% 以上になる。そして、4 種目どちらでもないという回答している教員を合わせれば 70% 以上の教員が、器械運動の領域において得意・やや得意の種目を持っていないということになり器械運動の苦手意識が高いということが言える。

器械運動を指導するうえで得意種目を 1 つでも持っている教員は、約 30% みられた。器械運動種目の中では、マット運動や跳び箱運動などはむずかしさを感じていない教員も見られ種目の違いによる意識も重要なポイントになると考えられる。

2. 器械運動の指導で困っていることについて

質問 3 で指導上困っていることについて回答を求めた。質問 1 の指導の難しさ、質問 2 の得意・不得意の回答の要因と深い関係がある。「技能の手本が見せられない」「指導・支援のポイントがわからない」「けががとても不安である」の 3 項目が高い回答であった。

器械運動は、できる・できないが明らかな運動である。教員も手本を見せる重要性を強く認識している反面、技能の手本を見せられないことにジレンマを感じている。さらに、教員の加齢化や体力的な問題、あるいは教員が元来、器械運動種目の技能を身に付けてこなかったことも困り感として挙げている要因の一つとして考えられる。教員自身の経験を指導に活かすことは重要であるが、技能教科の特性として手本を見せられない、あるいはできないことが指導に影響を与えている教員が多いことも今回の回答から考えることができる。

「児童の技能差をどのように指導・支援していくか」の回答が多い点は、器械運動の技能を理解していることと深い関係がある。「技能の構成要素は、何か?」「どのように助言や支援すればできるようになるか?」器械運動の専門的知識の理解と関わりがあるので非常

に難しい課題であると考え。理論的知識を身に付け、児童の実技を観察し、支援していく指導方法は、とても難しさがあると考え。しかしながら、指導のポイントについての理解は深めていかなければ当然指導につながらない。技能の手本を見せられないときの ICT 機能の活用する場合でも助言や支援するための知識が必要になってくる。

「けがをするのが不安である」についての回答が多かった。自由記述の中で「技能を身に付けるための児童の基礎体力が衰えている」「児童には、体幹などの体力が衰えている」などの記述があった。けがにつながる要因として児童の体力低下が、けがにつながる要因であると考え教員もいた。「自分の体を支えられない」「手の着き方が正確にできない」などからけがにつながってしまう不安を抱えているのではないかと考える。適切な指導ができず、けがを引き起こしてしまうのではないかと考え、不安を持つ教員も多い。また、子供たちの予想できない動きや人数が多く観察しきれず見えないところでのけがについても不安を持っているとも考えられる。教員が授業を進めるうえでけがを最小限にするための場の工夫も求めていると考える。

3. 体育実技講習会で研修したい内容について

教員が講習会に何を求めているか、その期待に応え日常の授業に活かすことのできる講習会を考えていかなければならない。

今回の結果からは、

- ① 楽しく行うための場の工夫について
- ② 技能を身に付けさせるポイントについて
- ③ 低学年・中学年向けの授業とは何か?

「器械運動の指導の難しさ」「器械運動の指導で困っていること」との関わりはとても深いと考えられる。

各種目において「技能を身に付けさせる」つまり、できるようにするためには、場の工夫が大切だと考えている教員が多い。「どのようにしたらできるようになるだろうか。」「マットをどのように並べるか、跳び箱をどのように並べるか、ロイター板をどのように使うか」などについて学ぶ機会が少ないために、講習会に求めていると考える。また、けがの防止からも安全に活動していくための場の工夫も必要性を感じているようである。

技能のポイントの理解を深めたい考える教員もやはり「技能を身に付けさせるにはどうしたらよいか」という考えがもとになっている。いろいろな動画を利用するなど教材を工夫しているがなかなか見る機会がない。あるいは、見てもわからないから学びたいと考えているのだろう。器械運動については、低学年から高学年まで様々な技能の習得を求められている。しかし、すべての技能を経験させて身に付けさせていくというより、児童にあった技に取り組みせ、児童にあった力の使い方や方法で技の習得を図る授業を展開していく必要があると考えられる。高学年の器械運動につなげていくためにも低学年の授業はとても大切である。よって低学年の授業研修は、高学年の器械運動につなげていくためにも系統立てて理解を深めておく必要がある。低学年の授業内容についての研修会は、なかなか実施されていない。系統性を持った取り組みが求められる体育の授業だからこそ、低学年の器械運動の在り方について学びたいと考える教員が多いと考える。自由記述の中には、「安全確保と技の成功を導く教師側の補助について（手の位置）」について意見があった。けがについては不安であり、具体的に「どのように補助をすれば安全に、そして、技を身に付けることができるか」質問3の回答と関連してみると当然な意見かもしれない。

講習会後のアンケートでは、次のような感想が寄せられた。

- 子供それぞれの得意な動き・できる動きを見取り、伸ばす・利用することが大切であるという話が印象的であった。少しでも「できる」「できそう」「またやってみよう」と思える指導を心掛けていきたいと思えます。
- ぶらんこの動きがマットや鉄棒運動につながっているとは驚きました。
- 鉄棒運動で一つ一つポイントを絞って実践できたので考えながらコツをつかむことができました。
- マットも鉄棒も苦手なので今回コツやポイントを教えていただきありがたかったです。
- 自分は小学校の時体育は苦手と評価も悪く、授業はいつも逃げていました。なので、器械運動のできるようになるポイントを児童にいつも示せずにいました。「指導は、これでなければならぬ」という考えからいろいろな動きを試させてみたいと思うよ

うになりました。

- 苦手意識が強くありましたが、身近なものを使って楽しく授業ができそうで安心しました。今日から私も練習しようと思えます。
- 感覚を身に付けるための補助具がたいへん効果的だと感じた。
- 今まで鉄棒運動の指導では、どういった支援をしていったらよいか悩むことが多かったですが、今回の指導のポイントを教えていただき子供たちに自信を持って教えることができると思えます。
- 鉄棒運動で今まで必要だと思っていた動きがなくてもできることに驚いた。

以上の感想からも、今回の講習会においては、教員の苦手意識を少しでも解消できるような講習会が実施されたと考えられる。

VI まとめ

小学校の教員が体育の授業についてどんなことを考えているか、どんなことを思っているか、理解する上でとてもよいきっかけになった。技能教科においては、すべての領域において教員の経験の差が大きな影響を受ける。できる種目、できない種目、経験してきた種目、経験してこない種目について教員間の差が大きい。今回の調査で、特に器械運動に指導に対する教員の意識、さらに体育実技講習会の在り方についての意識を少なからず把握することができた。器械運動が教員にとって、苦手意識が高い題材であることが今回の調査で明らかになった。

現在学校全体で取り組んでいる体力向上プランについても全職員の共通理解が必要である。すべての職員が児童のためによりよい体育授業を構築したいと考えている。体育の授業が原点である。体育授業を大切に、授業で何ができるのか、何ができないのかを整理していかなければならない。体育授業に関わる教員が、体育の授業を楽しく安全に指導していくことができるよう支援が必要である。体力向上が叫ばれている中で、体育授業の苦手意識をどう克服し、授業を展開してもらうか。体育主任のサポートは重要であると考えられる。「体育コーディネーター（仮称）」という役割が小学校の中で必要と考えて少しずつ分掌として位置づけられるようになってきた。学校規模によって対応の

違いはあるが、専科制では授業を受け持つ時間に限りがある。学校全体の体力向上、体育授業の充実を図るためには、学校全体を見渡し、教員をサポートする体制を構築する必要がある。今回の器械運動だけでなく他の種目についても研究する余地はある。体育実技講習会でそのようなサポートができるか、どのようなサポートをしたほうが良いのか、教員の意識を大切に、検討が必要である。児童は体育の授業を楽しみにしている。楽しく体を動かし、技能を身に付け、さらに、運動に・スポーツに関わらせてあげることができる。

教員の意識を把握して行う講習会、教員のニーズにこたえる講習会を企画し、開催することが教員の資質向上につながると考える。

今回、アンケート結果から「器械運動指導が得意・不得意であることと困っている内容についての相違」なども明らかにすることができた。今後器械運動だけでなく、ボール運動や陸上運動などの他の種目についても教員の意識調査を行い、学校体育授業の充実を図るための方策を研究していきたい。

参考文献

- 1) 小学校学習指導要領 体育編 文部科学省 平成29年3月
- 2) 小学校学習指導要領解説体育編 文部科学省 平成29年3月
- 3) 高橋健夫／三木四郎／長野淳次郎／三木肇編著 1998年4月 器械運動の授業づくり 大修館書店
- 4) 学校体育実技指導資料第10集「器械運動指導の手引き」文部科学省 平成27年3月
- 5) 阿部正臣・梶原洋子・木村一郎 1983年 運動領域からみた教科体育の意識(第1報)―器械運動を中心として―文教大学教育学部紀要第17巻 pp26-37
- 6) 阿部正臣・梶原洋子・木村一郎 1985年 運動領域からみた教科体育の意識(第2報)―教職経験別からみた器械運動の意識を中心として―文教大学教育学部紀要第19巻 pp40-48
- 7) 水島宏一 2004年10月29日 器械運動の指導に関する研究 東京学芸大学紀要第5部門芸術・健康・スポーツ科学 Vol.56 pp103-119
- 8) 胡泰志・古谷嘉一郎 2016年3月 マット運動に対する意識に関する研究―教職志望学生を対象として―比治山大学比治山大学短期学部教職課程研究 第2巻 pp36-41
- 9) 長谷川晃一・平田佳弘・黒川隆志 2017年3月 学校体育における器械運動実施上の問題点に関する調査研究―中学校保健体育教員への面接調査を通して―環太平洋大学研究紀要第11巻 pp161-170
- 10) 藤田雅文・三好亮太郎・正木晃・吉川健太 2018年2月 小学校中・高学年の器械運動の指導法に関する研究 鳴門教育大学授業実践研究 学部・大学院の授業改善を目指して 第17巻 pp73-81
- 11) 長谷川晃一・赤松敏之・黒川隆志・森徳・平田佳弘・小倉晃布 学校体育現場における器械運動の体系的指導に関する研究―小中学校教員へのアンケート調査を通して―環太平洋大学研究紀要第12巻 pp157-166

(しみず きよし・しおばら しげる・かねこ よしき・せきぐち あきひろ・たかはし たまみ・あらい よしひろ)